

第27回 マケドニアの米生産地に行く

マケドニア共和国は、バルカン半島の南方にあり、陸に囲まれた面積2.5万平方キロ(日本の南九州よりやや大きい)、人口は約200万人の小国である。旧ユーゴスラビア連邦の構成国の1つであったが、1991年に独立した。2005年にEU加盟候補国となっている。

マケドニア人は比較的米をよく食べる。マケドニア人何人かに聞いたところでは、週1回は食べるそうだ。よく使われているのは中粒種で、肉料理の付け合わせにしたり、ロールキャベツなどに米を入れたりする。マケドニアの米の生産量は年間2.5~3万トン、作付面積は3,500~5,000ha程度だが、米の生産は長い歴史を持つ。今回、マケドニア最大の米産地であるコチャニ市周辺の水田地帯を訪問する機会を得たので、ここに紹介したい。



1 歴史的な米の生産地コチャニ

マケドニア首都スコピエから南西に車で2時間、花がたくさん見える採草場が広がる丘陵地帯を過ぎると、コチャニの平原に入り、水田が国道の両側に広がる。コチャニ平原は盆地であり、北西から南東に流れるブレガルニカ川と周辺の山から流れ込む支流は豊富な水量と肥沃な土壌をもたらしている。また、コチャニ平原の平均気温は13度とマケドニアの中でも高く、このような条件がバルカン半島の中でも有数の米の産地を作りだしたのだろう。

コチャニ平原でいつ頃からコメ生産が始まったのかは定かではない。「マルコポーロの時代に中国から伝わった」「アレキサンダー大王の時代からじゃないか」と尋ねる相手によって答えも様々だが、非常に長い歴史を持つことは確かなようだ。

ちなみに、コチャニは昔からコウノトリが多いことでも有名だ。コウノトリの巣の乗った民家がたくさん見られる。水田への肥料・農薬の使用が少なく、コウノトリの住みやすい条件が維持されているということだろう。

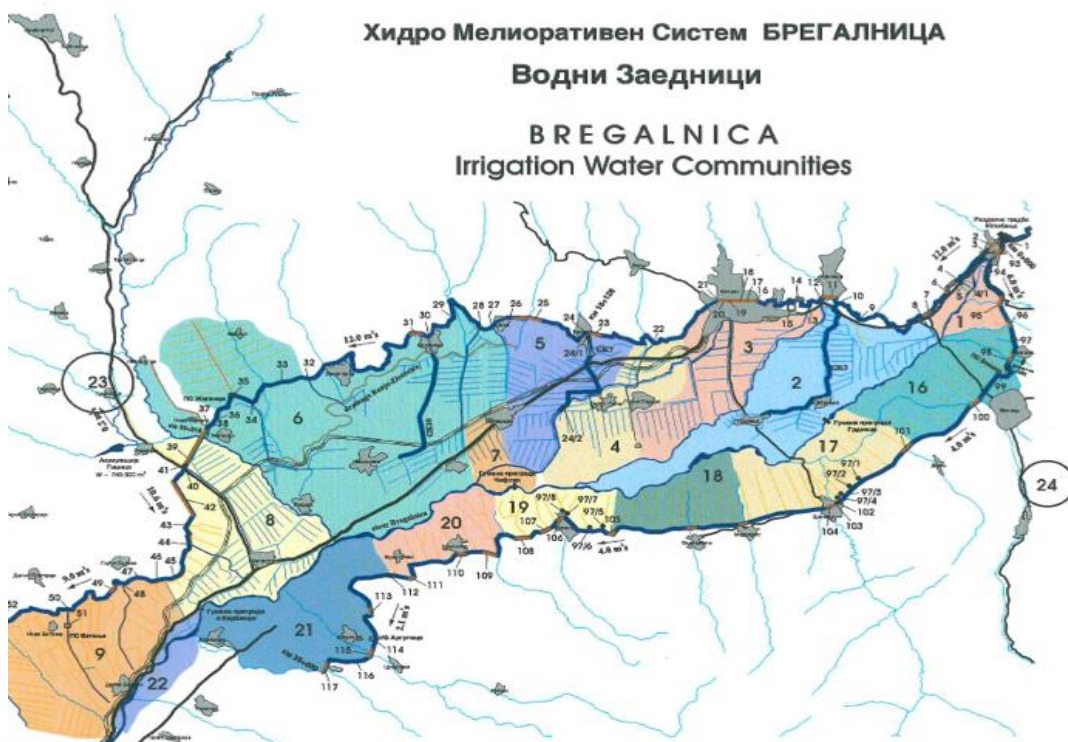


2 水管理会社の話

水田の水管理は、農業者や農業者組合が行うのではなく、水管理の専門業者が行っている。このような水管理企業は、水路を作り、維持・管理し、農家はそれに対してお金を払う。民間の水管理会社の他、地域コミュニティが運営する非営利団体が管理する場合もあるそうだが、

このようなタイプはあまり上手くいっていないようで、民間企業の割合が高まっているようだ。今回、そのような水管理会社の1つを訪問し、話を聞くことができた。

下の図は、コチャニの農地の灌漑マップだが、この会社は、下の図で色分けされた地域のうち2番、3番、5番、8番、9番の地域の水管理を行っている。図にあるように、水路は幹線水路である1次水路(太い紺色の線)、2次水路(細い紺色の線)、末端の3次水路(細い水色の線)に区分されている。農業者は1ha 当たり年間約 15,000 円を払い、水を使っている。



写真左端が説明してくれた水管理会社の部長。壁には民族衣装を着て稲刈りをする古い写真が飾られている。

畑地ではパイプラインが主体だが、水田の方は開放水路であり、水管理会社としての課題は、末端水路である3次水路が消滅しつつあることだそう。イスラエルやクロアチアなどを参考に水管理システムの改善を考えているとのことだった。コチャニの米生産については、近年、高温障害による破碎米や病気の増加が発生しており、新品種の導入に期待しているとのことだった。

3 コチャニの水田にて

事務所で説明を受けた後、水田を案内してもらった。

水田の1枚1枚の面積は10a、20a程度と小さいものが多い。たまに1haという圃場もあった。農家はそれぞれ5～10枚程度の水田を所有しているそう。写真からみても分かるように、直播き栽培である。訪問した5月末はどの水田も水をたっぷり貯めていたが、これから収穫までの間に1回水を落とすそう。また、米作りを続けると生産力が落ちてくるので、数年毎に水田を乾かし、大豆などを植えて地力を回復させるとのことだった。



水田を見学していると、作業に来た農業者とすれ違う。多くはバイクや、トラクターに乗ってくるが、中にロバが引く荷車に乗って来た人もいて驚いた。使われているコンバインやトラクターが古いことが悩みだ、と案内してくれた水管理会社の人が説明してくれた。30年以上もたつ機械を使っている人もザラとのことだ。新しいコンバインを買う場合には政府が半額を助成してくれるが、残りの半額の資金調達が難しいのだ。



4 ヨーロッパの中の小国として

コチャニの農業をめぐる昨今の悩みは、若い農業者がイタリアなどの近隣諸国に出稼ぎに出てしまい、農業者が高齢化していることだという。若者の EU 諸国、さらには米国、カナダ、オーストラリア等への移出は、強い産業や資源を持たないマケドニアにとって、農業のみならず国全体の問題であるようで、多くの人から同様の話を聞いた。案内をしてくれた水管理会社の部長は「ここで農業をしていけば年間 300 ユーロの所得にしかならないが、イタリアの農家で労働者として働けば 3000 ユーロの所得になる。しかし、生活費などの支出の大きさを考えれば、結局同じなのではないか」と嘆いていた。

コチャニには米の研究所もあり、より食味が良く、多投入にも耐えて、生産性の高い米の品種の導入に向けた試験研究などを行っている。導入する品種はイタリアのものが多いが、近年ではトルコからの品種の導入・共同開発も進めようとしているようだ。

首都のスコピエ市には、フランスのカルフルやギリシャ、トルコ資本のスーパー、ショッピングセンターが次々とできている。EU には加盟していないが、モノも人も資本も技術も大ヨーロッパの中で揺すぶられるマケドニアは、農業においても例外ではない。その中で、マケドニアの農業はどちらの方向を向いていけばよいのか？

ヨーロッパ型の多投入型で生産性の高い米生産を目指すコチャニの姿を見つつ、筆者としては、まだ比較的低投入の農業が行われていることを活用し、有機農産物生産などに活路を見いだす方がヨーロッパ市場での差別化が可能ではないかと感じた。実際にスーパーでは有機加工食品も並んでおり、そこにはマケドニアの有機認証マークに加えて、EU の有機認証マークがついている食品もあった。コウノトリの多い水田地帯、ポピーが咲き乱れる草地が今後とも維持されるようなマケドニア農業の将来に期待したい。



スコピエ市のスーパーで売られていた米。中粒種が多かった。